

翔友 VI

同志社大学航空部誌

特集 “滑空場物語”



Dec. '90

目 次

部長短信	小野 哲
アロウ・ヘッド	窪田 昌三

航空部便り

主将として	玉井 克典
主将を退いて一言	松田 剛
新入部員の眩き	佐武 百合
初ソロへの道	三田村宏明
ライセンスを取得して	松田 剛
空を掴む	白髪元監督
関西・東海学生グライダー競技会 第15回同立戦 航空部活動報告	

友校の頁

私の感じた同志社	
関西大学航空部監督	中川 義英

特集“滑空場物語”

玉水の風	今西 駒治
高松飛行場の思い出	渡辺 洋一
八尾の空	政 志郎
霧ヶ峰	石元 勲
鶉野の発見	樺島紳一郎
富山、青春の地	南村 清治
富山での慣熟飛行	恒藤 恭行
鳥取砂丘を望んで	箕浦 健二
岡山金甲山	阿部 克己
吉井川と父の思い出	速見 直喜
木曽川の流れ	北林 英之
歴史を刻む滑空場	石田 文雄

翔友会便り

飛行機と私	森 茂
日々雑感	白石美寿々
静岡より愛をこめて	小野田教弘
瀬戸内海を飛ぶ	吉岡 右二
卒業20年	吉岡 利春
心の宝	恒藤 恭行
遙かに沖縄より	岩田 武人
タマネギと国際空港	上ノ山正人

アメリカよいとこ	金石 真一
福岡空港って何?	広田 佳史
5時間滞空	野並 秀顕
今、将に翔ばん	山口 智啓
生れ変わった私	小馬 康史
芸術家の卵	浮田 勝成
憧れの OL 生活	小溝ひろみ
聖地巡礼	友広勝 他

機体紹介

東海支部便り	向井 清人
--------------	-------

第4回翔友会ゴルフ会

会員消息

翔友会行事及びスポーツユニオン参加行事

編集後記

表紙写真説明

これが特集滑空場物語“玉水の風”の舞台
になった木津川の川原で、戦後の学生グライダーは実にこの地に発したことになる。

永 大
田 竹

北 奥 渡 増 柳 吉 石 藤
尾 西 辺 田 島 川 田 田

今 小 牧 (中 大
西 西 野) 嶋 岡

部長短信

航空部長 小 野 哲
OB 会長

お変わりありませんか

酷暑残暑のあと台風と長雨、気象はとても変でした。

それよりなによりたまげたのは、サダムフセインの横車、またそれに律儀に動転反応するアメリカ、それに引きずられる英とソ連、フランス、それにさらに輪をかけてバタバタした倭のくにの過剰反応。暑苦しい砂嵐の国際政治も、それでも12月には急転して納まるのでしょうか。

納まりのわるいのが、即位式とダイジョウサイを御膳立した政府の後始末。かいふサンとかねまるサンは、イラクと北朝鮮のつけをどう払うのでしょうか。ばたばたと西武の4連勝で、5戦以後のチケットお持ちの方は、破らずに関西東海戦と同日戦のあとで払い戻して、翔友会でビールかけの足しにしましょう。それとも11月のホウヨクかいの2次会で趣向を凝らしますか。

趣向といえば、来年のこと。鬼が笑っても、4月29日はカラス型生誕100年で。飛行機にはじめて乗ったは「空への憧れの気持ち」だったのは、当然というか、やはり不思議です。人が乗ったのもはじめは1人で、やがて大勢が、のるというか運ばれる時代になって、かえってそとを見る窓はドンドン小さく、それから見えるのは雲ばかり……

そんな中で、後ろが教官の、前席の眺めのよさは舞い上がったひとしかわかりません。そらのスポーツを、からのスポーツと読む皮肉やサンと、その仲間は、単独で飛翔したことのないひとたち、その痩せ我慢と思ひましょう。痩せ我慢は、やっぱりイケマセン。すなおでなくちゃ。腕をみがきましょう。現役も OB も。それぞれに。いやどうも。

アロウ・ヘッド

監督 窪 田 昌 三

オリンピックアジア大会（北京）が終った。大選手団を送った日本は、2人の柔道世界チャンピオンが敗退したことに象徴されているように、あらゆる種目で惨敗と云っていい結果であった。大会直後に中国の新聞は、日本の凋落を明確に指摘して、「国家が豊かになり、選手は苦痛を伴う鍛錬に耐えられなくなった。それに、ゴルフなどレジャースポーツが広がったことなどが原因だろう」と分析したそう。この新聞記事を読んで、私は瞬間的に、近年の我が航空部の状況と実力に、それを重ね合せていた。

私の知っている（昭35年以降）の同志社は、所有機材と云えば、現在田辺格納庫の片隅に骨組が残る（複元中の）プライマリーが唯一であり、関東支部の各大学とは機材・実力共にそれこそ天地の差をつけられ、追い越すことは夢の又夢、追いつくことすら容易なことではない状況の中から、何とか、少しでも彼等に近付こう、彼らの姿の見える所迄近寄りたいと云う止むに止まれぬ気持ちが、OB会の経済的援助は無いに等しく（一部、非常に少数ではあったが、理解と協力を惜しまなかったOBの支援はあった）学校側のそれは言うに及ばず（返済期限付の借入れはさせてくれた）の中で、日常のクラブ運営と合宿負担の上に、新機体購入の巨大な資金作りのアルバイトに耐えて、文字通り自分達の汗で買った愛機を、宝物か恋人の様に練習に励んでいた（H-23CイオラスからKa-6Eアイオーンに至る）時代は、部も部員も貧乏だった。しかし、部員の練習への気迫と真剣味、競技への執念は充満していた。同志社は、常に関西をリードし、関東からもマークされる存在になっていた。

私は、過去の栄光や、伝統への郷愁から昔語り